歴史探訪

「うつくしま」への

裏磐梯に木を植えた男
磐梯山緑化の父 遠藤現夢が描いた夢

男性的な荒々しさを見せる磐梯山のすそ野に広がる高原の美しさ――今日の裏磐梯は、まさに自然が創り上げた至高の芸術品です。この地の緑豊かな自然を見ると、明治二十一年（1888）の磐梯山噴火によって、当時すさまじい被害を受け泥土に覆われていたとは信じがたいほどです。それだけにわたしたちは、当時、幾多の苦難を乗り越えて、岩石が転がる裏磐梯の荒野に木を植えた人・遠藤現夢を忘れてはならないでしょう。ここでは、磐梯山噴火記念館副館長の佐藤公さんにお話を伺いながら、現夢が描いた夢と緑化にかけた情熱に想いを馳せてみました。

■美しい自然をよみがえらせた、不屈の精神

朱色、藍色、緑色、青色、コバルト……五色沼は「神秘的な色彩の叙情詩」とも言える見事な美しさを誇っています。磐梯山噴火によって裏磐梯の多くの川がせき止められて出来たこれらの湖沼群の周りには、木々の緑が広がり、一度見たら忘れられない魅力で満ちています。「しかしこの美しい景観は、そのすべてが自然の造形物ではありません。噴火後、泥土と化したこの裏磐梯に、緑を取り戻そうと活動した人々がいたのです。とりわけ五色沼周辺の宝石のように美しい風景を見ることができるのは、実は遠藤現夢のおかげなのです」と、佐藤さんは話します。

荒々しい裏磐梯の山容を背に、落ち着いた美しさを見せる弥六沼は、現夢の事業を支えた中村弥六博士にちなんで命名されました

若き日の遠藤現夢

遠藤現夢（十次郎）

元治元年（1864）、会津若松市に商家の十二男として生まれる。少年時代より剣を学び、師範としても活躍した。明治三十四年（1901）、若松～田島間の新道開通に伴い、運送業を開始。明治四十年（1907）、水力発電の開発を企画し、水流調査のため裏磐梯を探索。明治四十三年（1910）、裏磐梯の植林を開始し、約2年で完成。昭和九年（1934）、71歳で永眠。

磐梯山噴火の惨状――これを現夢が目の当たりにした時、その胸中には、戊辰戦争（1868）で落城した鶴ケ城の悲惨さと、敗戦によって虐げられた長い生活の体験がよみがえったのかもしれません。このことについて佐藤さんは、「その時、現夢が幼いころから培った不屈の精神に火がともり、後に『不毛の地から立ち上がって見事な森林に変えよう』と志す原動力になったのではないか、と思いますね」と分析します。

噴火後間もない磐梯山からは噴煙が立ち上り、一帯を覆っている土石流が、その壊滅的な被害を物語っています

■幾多の試練を乗り越えた、緑化への道

噴火から十数年たったころ、国では荒廃したこの地を開拓するにあたり、国有地を無償で貸与して植林を行い、それが成功するとその地を払い下げるという形での開発を計画していました。現夢はこの計画に大きな意欲をもって臨みました。当時すでに地元の事業家であった現夢は、以前から裏磐梯の開発に情熱を燃やし、水力発電の開発を目指していたこともあって絶えず裏磐梯には足を運んでいました。また、早くから植林に着目し、明治四十年（1907）にはすでに、会津松平家の見禰山に桐6000本を植えることに成功していたことも、躊躇のない決断につながったようです。現夢は明治四十三年（1910）に裏磐梯の植林を開始しました。まず十数人の作業員を雇い、狩猟で懇意にしていた林学の大家・中村弥六博士の指導を得ながら、現夢は苗木を新潟から汽車で運び、猪苗代からは馬車で運んで、噴火口下一帯の1350町歩の土地にアカマツ苗5万本、スギ苗3万本、ウルシ苗2万本の合計10万本の植林を、約2年間を費やして完成させたのです。「柳沼畔に建てた別荘兼事務所に寝泊まりし、自ら先頭に立ちながら柳の樹海を切り開いての偉業でした」と、佐藤さんはそのただならぬ労苦をしのびます。

しかしこのような大事業は、一人でなし得るものではありません。地元の多くの協力者、なかでもとりわけ宮森太左右衛門の活躍は欠かせないものでした。現夢を盛り立てて磐梯施業森林組合を設立し、「まず道路の開発が先決」と吐出（現在の剣ケ峰交差点）から弥六沼までの道路の完成に尽力したその活躍ぶりは、植林とともに「裏磐梯を一大公園、観光地にしたい」という夢を持っていた現夢にとっては、かけがえのない存在でした。佐藤さんは「自然保護や観光という概念がほとんど浸透していなかったこの時代に、現夢をはじめとする多くの先人たちが、先を見通したスケールの大きな夢を描き、その実現に向けて着実に成果を挙げていったことは、地元にとって大きな誇りです」と話します。

「この美しい自然は、現夢をはじめとする先人たちの夢と情熱があってこそ、つくり上げられたものなのです」と、当時の労苦をしのぶ佐藤さん

植林当時の柳沼畔にたたずむ、現夢の別荘兼事務所。現夢はここに寝泊まりし、自ら先頭に立って植林を完成させました

その後、現夢は大正八年（1919）に植林の完成届を県に提出し、山地の払い下げを求めたものの許可されませんでした。そこで現夢は、開発の際に指導を得た中村弥六博士の力添えによって、時の総理大臣・原敬に直訴し、ようやく払い下げが許可されました。現夢はこの恩に報い、博士の名前を後世に伝えようと、五色沼の一つにその名を残しました。それが「弥六沼」で、いまもなお、美しい趣を見せながらたたずんでいます。

■明日に伝えたい、現夢の情熱

現夢は、その美しい緑が五色沼に根付くのを見届け、生前に自分の墓碑を柳沼のそばに建てました。墓碑には噴火の際に飛来した最大の巨岩を選んだと伝えられています。さらに現夢は、その傍らに「ながきよにみじかきいのち五十年ふんかおもへば夢の世の中」という辞世の歌を刻んだ歌碑と、磐梯噴火災死の供養碑を建てた後、昭和九年（1934）に永眠しました。佐藤さんは「当時は、周りの木々もそれほど大きくなかったので、おそらくこの墓からは、自らが育てた五色沼の自然を一望できたのではないでしょうか」と話します。

死して後もなお、こよなく愛した裏磐梯の自然を見守りたいと願った現夢の想いは、その情熱とともに、現代のわたしたちに受け継がれました。その一つが、五色沼の自然を守る「パークボランティア」の人々の活動です。パークボランティアは、全国各地の国立公園でも同様の活動をしていますが、とりわけ五色沼では、その精神が現夢の時代から先覚的に培われています。美しい自然とは、決して何もせずに守られるものではありません。それは、かけがえのない自然を守りはぐくんでいこうとする、人間の強い意志と行動によって築かれるもの――現夢が今のわたしたちに託したメッセージを胸に、広く誇りうる美しいふくしまを守っていくこと。自然を慈しむ心を次の世代に引き継いでいくこと。それは、現代に生きるわたしたちに課せられた使命なのではないでしょうか。

柳沼を過ぎ、細長い道を歩いていくと、森の静寂の中に現夢の墓が現れます。高さ10㍍はあろうかという巨大なその岩の姿は、美しい五色沼の自然を、現夢がいまもなお見守っているかのようです（写真提供：小桧山六郎氏）

五色沼の美しい自然を愛でる人々。それが、先人の測りしれない努力によって築かれたことを、決して忘れてはなりません

五色沼の中で最も大きい毘沙門沼には、散策のかたわらボート遊びに興ずる人々が集います